

歯根破折歯に長期間の固定を行ったダウン症患者の一例

○新川弘恵、久保田一見、*藤原卓

長大医歯病・小児歯、*長大院・医歯薬・小児歯

【緒言】ダウン症患者は歯牙外傷を受けた場合、免疫能の低下、歯周疾患および対応の難しさから、受傷後の予後管理が困難である。今回我々は、外傷による歯根破折後、3年間にわたり矯正用ワイヤーによるレジン固定を行い、良好な経過を得られた先天性心疾患を有するダウン症児の症例について報告する。

【症例】

<初診>平成元年6月26日生 5歳11か月 男児

<全身的既往歴>ダウン症候群、三尖弁閉鎖症、甲状腺機能低下症(医学部小児科で定期管理中)

<歯科的既往歴>平成6年6月16日、小児科医より歯科治療目的にて当科に紹介。3度の全身麻酔での治療の後、当科にて定期管理を行っている。

<現症>平成12年6月26日(11歳0か月時)学校での掃除中に転倒。上顎前歯部を受傷し、当科受診。エックス線診査にて、左側中切歯歯根中央部に破折線を認める。歯冠部の1mm程度の挺出を認め、動揺も著明であった。歯根はほぼ完成していたが、短根歯であった。歯冠破折は認めず、歯髄への感染はないものと思われた。<処置経過>上顎前歯部の印象採得を行い、模型上で矯正用ワイヤーを適合させ、レジンによる固定を行った。月1-2度の口腔衛生指導およびエックス線撮影を行い、外傷の治療、感染の有無を確認したが、経過は良好であり、3年後にワイヤーの除去を行った。

【考察】本症例では、患児が心疾患を有するダウン症児であり、免疫能低下による治療遅延が考えられたこと、また、歯周疾患に罹患しやすく、短根歯であったことから、通常より固定期間を長く設定した。また、感染予防を主目的として頻回の口腔衛生指導を行った。今回良好な結果を得られたのは、頻回の口腔衛生指導により歯科での口腔管理を徹底したこと、および3年間という長期の固定によって受傷した歯や歯周組織への負担を軽減できたためであると考えられる。

若年者における顎関節形態の左右差と関節円板障害との関係について

○深水 篤、重田浩樹、長谷川大子、
松本祐子、石谷徳人、山崎要一
鹿大・院医歯・口腔小児

【目的】顎関節形態と関節円板障害との関係を検討した報告は多いが、顎関節形態の左右差と関節円板障害の関連性を調査した報告はない。そこで、今回両者の関係について検討したので報告する。

【研究方法】対象は鹿児島大学病院 発達系歯科センター 小児歯科外来を訪れ、顎関節症と診断された6歳から20歳(平均年齢14歳7か月)の215名とした。研究方法は、まず、1) MR画像を用い、左右の顎関節形態の一致性を検討した。解析項目は前頭断MR画像では①下顎頭の形態、②下顎頭の内側極と外側極の高さの比較、③下顎窩の形態、矢状断MR画像では④下顎窩の外側部の形態、⑤中央部の形態、⑥内側部の形態とした。次に、2) 対象者を両側もしくは片側に関節円板障害の認められる群と関節円板障害の認められない群の2群に分類した。そして、1)と2)の関係性を χ^2 検定を用いて分析した。

【結果】顎関節形態の左右差と関節円板障害との関係について、有意差の認められた解析項目は、②と④であった。

【考察】下顎頭のリモデリングは顎関節への機械的要求に呼応して起こる。また、解剖学的に顎関節腔は内外側方向では外側部で最も薄いことから、咀嚼機能時の負荷を受け易い。さらに、関節円板は外前方に転位し易く、関節円板が外前方転位した状態で下顎頭が機能すると、下顎窩の外側部は下顎頭外側極からより強い負荷を受けるため、この部位において形態変化が起こる頻度は高いと考えられる。以上より、下顎頭や下顎窩外側部での顎関節形態の左右差と関節円板障害との関係が示唆された。